



国家汉办/孔子学院总部  
Hanban/Confucius Institute Headquarters

《中国思想家评传》简明读本 日中文对照版

主编 周宪 程爱民

郑杰文 张倩 著

松川和司 笠原祥士郎 译

# 墨子

北陆大学出版会  
南京大学出版社

《中国思想家评传》简明读本 日中文对照版

主编 周宪 程爱民

郑杰文 张倩 著

松川和司 笠原祥士郎 译

# 墨子

北陆大学出版社  
南京大学出版社

## 图书在版编目(CIP)数据

墨子:日汉对照 / 郑杰文,张倩著;(日)松川和司,笠原祥士郎译. —南京:南京大学出版社,2010.8  
(中国思想家评传丛书简明读本)  
ISBN 978-7-305-07529-2

I. ①墨… II. ①郑…②张…③松…④笠… III.  
①墨翟(前480~前420)—评传—汉、日 IV. ①B224.5

中国版本图书馆CIP数据核字(2010)第165812号

出版发行 南京大学出版社  
社 址 南京市汉口路22号 邮 编 210093  
网 址 <http://www.NjupCo.com>  
出版人 左 健

丛 书 名 《中国思想家评传》简明读本·日中文对照版  
书 名 墨 子  
著 者 郑杰文 张 倩  
译 者 [日]松川和司 笠原祥士郎  
责任编辑 田 雁 编辑热线 025-83596027

照 排 南京紫藤制版印务中心  
印 刷 南京市溧水秦源印务有限公司  
开 本 850×1168 1/32 印张 6.875 字数 170千  
版 次 2010年10月第1版 2010年10月第1次印刷  
ISBN 978-7-305-07529-2  
定 价 20.00元

发行热线 025-83594756  
电子邮箱 [Press@NjupCo.com](mailto:Press@NjupCo.com)  
[Sales@NjupCo.com](mailto:Sales@NjupCo.com)(市场部)

---

\* 版权所有,侵权必究

\* 凡购买南大版图书,如有印装质量问题,请与所购  
图书销售部门联系调换

## 序

古代中国は人類の文明にとっても精神にとっても、ゆりかごのようなものです。

ドイツ人哲学者カール ヤスパーズ(Karl Jaspers, 1883~1996)の見解によれば、エジプト、メソポタミア、インド、中国の四大文明の発祥の後、紀元前 800 年から紀元前 200 年の間、おもに紀元前 500 年を中心に、世界中に連続した体系的な文明がふたたび生まれたということです。この時代のことを彼は枢軸時代(Axial Age)と呼んでいます。これらの文明には大思想家たちが現れ、彼らは人類や世界の根源的諸問題について思索し、<sup>けだつ</sup>解脱や超越の目標と方法について示唆したのです。たとえば、中国の孔子、老子、墨子、荘子などの思想家たちや、インドのウパニシャド(奥義書)や釈迦、ギリシャの詩人ホメロス、悲劇詩人のトゥキユディデイス、哲学者のヘラクレイトス、プラトン、アリストテレス、さらにパレスチナの思想家たちが、中国、インドおよび西方諸国の、それぞれ相互に交流のない地域において、ほとんど同時に出現したのです。そして、彼ら大思想家たちが創り上げた思想的様式および世界的な宗教は、現代もなお人類に精神のよりどころとされていて、彼らは今もなお我々の生活とともにあるのです。

さて、中国五千年の文明の歴史を座標として、ヤスパーズの視点を重ね合わせると、紀元前 551 年から紀元前 479 年の間に生きた孔子は、まさに中国文明がこの枢軸時代にさしかかったころの代表的人物であり、彼はこの五千年の中間点あるいは折り返し地点にあったと言えます。



黄河文明の発祥から孔子の時代に至るまでと、孔子の時代から我々の現代に至るまでは、ともにそれぞれ2500年前後を数えることができます。孔子が現われる前には、中国に思想というものはあっても思想家は存在しませんでした。孔子以降、中国にも古代思想家たちが次々と現れて、彼らは中華民族だけでなく全人類にとっても価値のある豊かな思想的遺産を残したのです。孔子が唱えた「故きを温めて新しきを知る」<sup>ふる</sup>①とか「信じて古<sup>いにし</sup>えを好む」<sup>いにし</sup>②といった思想上の原則は、中国の、伝統を重んじるという姿勢に影響を及ぼしました。すなわち、古人の思想的遺産を尊重し、立ち止まることなく古人の思想を理解しそれを発展させ続け、その中から思考や宇宙・社会・人生問題に対応するためのすべを人々は獲得したのです。このことこそが、我々が今この「中国思想家評伝」簡明読本版(日本語版「中国著名歴史人物集」)を世に問う理由でもあります。

中国の悠久なる古代思想史を見渡すと、思想家たちが貢献した成果には深い造詣と高い価値があり、それは世界思想史上において独自の旗印を掲げるものとなりました。それら数々の思想は現代の中国あるいは世界にとっても、日々新しく生まれ、生命力にあふれたものと言えます。百家争鳴の先秦諸子、スケールの大きな含蓄のある漢や唐の経学<sup>③</sup>、親しみやすく幽玄な魏晋の玄学<sup>④</sup>や、知性を尽くした宋や明の理学<sup>⑤</sup>など、

---

① 「論語」「為政」(訳者注)。

② 「論語」「術而」(訳者注)。

③ 儒教古典の解釈学。(訳者注)

④ 「老子」「莊子」「易」を尊崇する学風。(訳者注)

⑤ 人間の道徳性や天と人を貫くことわり(理)を追求する新儒学。(訳者注)

どれも思想学術のあでやかな花であり、仏教の色即是空の悟りや道教の神仙修養は宗教的信仰の沃土<sup>よくと</sup>と言えましょう。そのほかにも、経世済民<sup>①</sup>の政治、経済思想や自然の理をも乗り越えようとする巧みの科学技術や工芸の道、風雅の真髓に迫り、彩りの落ちることのない文学芸術……これらすべてにわたって豊かな思想を醸<sup>かも</sup>し出しています。中国の思想はそれぞれが時には水と火の関係のように相容れることなく激しく論争し合ったかと思うと、さまざまな思想が合致し合い、道は異なれども同じところに行き着いたりしましたし、また、いろいろな学派が生まれ林立したかと思うと、それらが互いに啓発し合い、奥義を究めていったりしました。儒、仏、道の三教も論争のなかから融合し、さまざまな思想がともに行われて、対立しませんでした。このように、中国思想の成立は豊富で多彩なものであり、天人合一<sup>②</sup>、知行合一<sup>③</sup>、剛健中和<sup>④</sup>などの精神的伝統を貫きつつ、継承や解釈をしていきながら変遷し、一代ごとに研ぎ澄まされ、総合と新奇の特色を表し続けてきたのです。

中国古代思想史には、思想家とか思索者とか、哲学者などといった言い方や概念はなく、聖人、賢人、哲人、智者、諸子、大師などの呼称があるだけです。とはいえ、こうした呼称こそがまさに中国古代思想家の特徴を概括していると言えます。彼らの社会的身分は、たいていが教師か学者でしたが、それは彼らの思想が道德と智慧<sup>ちえ</sup>を追求したものだっ

---

① 世を治め、民の苦しみを救うこと。(訳者注)

② 人の行為は天と連動していることを強調する考え方。(訳者注)

③ 知って行わないのは、未だ知らないことと同じであることを主張した実践重視の教え。(訳者注)

④ 強く健やかでありつつ、異なる性質を持った者同士が交わること。(訳者注)



からです。もちろん、より広い範囲から見れば、中国古代思想は、政治、軍事、経済、法律、工芸、科学技術、文学、芸術、宗教など多くの文明的領域において、大きな貢献をしましたが、創始者や集大成者など傑出した人物の言論や著作、あるいは弟子たちによってまとめられた言行録などこそが中国古代思想の重要な内容なのです。中国人は、孔子以前にすでに、「功を立て」、「徳を立て」、「言を立て」るの「三不朽」といった、超越を追求するための道しるべを作り上げましたが、これら人類社会のためにうち立てた大きな功績、個人的道德修行の完遂と思想、智慧、学説などのすべてはまさに不朽の歴史的遺産とも言えます。こうした意味から言えば、中国思想家たちの手による成果は、我々現代人が慣れ親しんだ職業思想家、哲学者あるいは宗教的先知をも大きく超えていると言えましょう。そして、我々が『中国思想家評伝』簡明読本を執筆するにあたって、こうした基準に基づいて思想家たちを選びました。

さて、南京大学名誉学長の故匡きょう亜明あめい教授の監修を仰いで、南京大学出版社より出版された『中国思想家評伝叢書』は、中国 20 世紀以来、最も広大な中国思想家研究の成果と言えましょう。今回、簡明読本叢書の編集出版にあたって、まずこの 200 冊にもおよぶ『中国思想家評伝叢書』の労苦に深い敬意を表すものであります。この巨人の双肩に依りつつ、本簡明読本においても、学術的基礎を保持しながら、なおかつそこにいくらかの新鮮味を加えたつもりです。その新鮮味とは内容は深いままに表現は分かりやすくし、より広範な読者をも惹ひきつけるものにしたことであります。思索と読みやすい表現、生き生きとした物語と智慧……中国文化の「拡大」と文化のグローバル化を提唱する今日、この読本による古代中国思想家たちの紹介を通して、中国思想に関心を

持たれる読者のみなさんが、我々と古人たちとがともに直面する一つ一つの問題を掲げながら、古代の中国思想家たちと胸襟を開いた対話をされることを期してやみません。

編集委員会

2008年9月



## 目 次

序 .....	1
第一章 群雄割拠の乱世に咲いたまばゆい花	
一 墨子学が生まれた文化的淵源と社会背景 .....	1
第二章 儒学を捨て、墨学を立て、義を行いて倦まず	
一 墨子の足跡と、反戦遊説 .....	6
第三章 新 <sup>たまたま</sup> 尽くとも火は消えず、後学者の台頭	
一 墨家後学の派閥と活動 .....	20
第四章 森羅万象に、独自の旗印を掲げる	
一 墨家の主要著作 .....	33
第五章 真理を求め、異彩を放つ	
一 「墨経」の主要な業績 .....	41
第六章 儉節すれば則ち昌んに、淫佚すれば則ち亡ぶ	
一 墨家の経済思想 .....	51
第七章 兼ねて相愛 <sup>あい</sup> し、こもごも相利す	
一 墨家の倫理思想 .....	57
第八章 非攻救守、積極的防御	
一 墨家の軍事思想 .....	64
第九章 天を尊び鬼に事 <sup>つか</sup> え、天と鬼神を利用して人を教える	
一 墨家の宗教学説 .....	71
第十章 勉めて教え勉めて学び、言をもって伝え身をもって教える	
一 墨家の教育思想 .....	78

第十一章	唯物の師祖、巧弁を精思する	
	一墨子の「三表法」	91
第十二章	人を任ずるにただ賢をもってし、統一を唱導する	
	一墨家の政治思想	94
第十三章	盛んなる由りして衰え、否極まりて泰来る	
	一墨学の衰退と復興	100
第十四章	延々と千年続き、その精神は滅びず	
	一墨学の影響	114
	主要参考図書	119
	推薦図書	120
	訳者あとがき	121

## 目录(中文版)

序 .....	125
一、群雄并起,乱世奇葩	
——墨学产生的文化渊源与社会背景 .....	129
二、弃儒立墨,行义不倦	
——墨子的生平事迹与止战游说 .....	132
三、薪尽火传,后来居上	
——墨家后学的派别及活动 .....	140
四、包罗万象,独树一帜	
——墨家的主要著作 .....	148
五、探求真知,异彩纷呈	
——《墨经》的主要成就 .....	153
六、俭节则昌,淫佚则亡	
——墨家的经济思想 .....	160
七、兼相爱,交相利	
——墨家的伦理思想 .....	164
八、非攻救守,积极防御	
——墨家的军事思想 .....	169
九、尊天事鬼,神道设教	
——墨家的宗教学说 .....	173
十、强教强学,言传身教	
——墨家的教育思想 .....	178

十一、唯物师祖,精思巧辩	
——墨家的“三表法” .....	186
十二、任人唯贤,倡导统一	
——墨家的政治思想 .....	188
十三、由盛而衰,否极泰来	
——墨学的衰亡与复兴 .....	192
十四、绵延千年,精神不灭	
——墨学的影响 .....	201

## 第一章 群雄割拠の乱世に咲いたまばゆい花

### —墨子学が生まれた文化的淵源と社会背景

春秋戦国時代、制鉄技術の絶え間ない進歩と鉄製工具の広範な普及によって、農業、手工業及び商業が飛躍的な発展を遂げました。文献資料や考古学の発掘によれば、春秋戦国時代には、旧来の粗雑な生産道具に代って、鉄器が農業生産に広く応用され、農業生産の飛躍的発展を促進させたことがわかります。鉄製農具の普及は大規模な農地耕作を可能にし、大規模な灌漑施設のための必要条件も整えることができました。鉄製農具の普及と灌漑施設の造営は、農業の個人労働に比較的恵まれた生産条件を提供し、農業生産技術のたゆまぬ進歩をもたらしました。また、牛耕が次第に普及し、耕作技術を顕著に向上させ、農業生産における「深く耕し、簡単に草を取る」という細かな生産も次第に行われるようになりました。また、鉄器の広範な応用は手工業労働にも鋭利で便利な工具をもたらし、諸国と各地域の手工業生産も飛躍的に向上しました。

こうした農業、手工業の飛躍的発展と社会分業制の絶え間ない拡大は商業と貨幣の往来の空前的な躍進を直接もたらし、都市の規模も日々拡大していきました。諸国の都、例えば臨淄<sup>りんし</sup>①、邯鄲<sup>かんなん</sup>②、洛陽<sup>らくやう</sup>③などが

---

① 春秋時代の斉の首府。(訳者注)

② 春秋時代の衛の首府で、戦国時代の趙の首府。日本では「邯鄲の夢」「邯鄲の歩み」の故事で有名。(訳者注)

③ 東周時代に洛邑と称され都が設置されて以来、後漢・曹魏・西晋・北魏・隋・後唐などの都城が設置された街。(訳者注)



商業の中心となりました。西周以来の「工商食官」<sup>①</sup>の独占的地位は打ち破られ、自由に商業活動に従事する商人階層が次第に大きく勢力を拡大し、<sup>げんこう</sup>弦高<sup>②</sup>、<sup>はんれい</sup>范蠡<sup>③</sup>などのような多くの有名な商人たちが現われるようになりました。

生産力の発展と生産道具の改良によって、大量の荒地が開墾され、官有農地だけではなく私有農地の範囲が拡大し続けていきました。これにより土地の私有化がますます進み、<sup>せいでんせい</sup>井田制<sup>④</sup>が日増しにすたれ、生産力発展により適した<sup>ふでん</sup>爰田制<sup>⑤</sup>にとって替わられることとなり、こうした一家族一戸単位の小規模生産方式は奴隷制度の集団労働方式にはるかに勝り、農業小規模生産方式の発展を促しました。

このような歴史的条件下で、新生産方式に適合した封建制生産関係<sup>⑥</sup>は徐々に拡大を見せ始めました。新旧の生産関係の矛盾と闘争は奴隷制度の統治秩序を根本から揺るがし、奴隷主貴族内部、奴隷主貴族と新興の地主階級の間での政治的権力抗争を引き起こしました。諸侯

---

① 西周時代の国家管理の商業制度。(訳者注)  
 ② 春秋時代の鄭国の大商人で、商業活動を通して秦国が鄭を侵略するという情報を察知し、祖国を救った人。(訳者注)  
 ③ 春秋時代楚国の人で、始め越王勾踐とともに呉と戦ったが、後に美人西施とともに離れ、財をなし財神と讃えられた人。(訳者注)  
 ④ 周時代に施行されていたと言われる土地制度。1里四方、900畝の田を「井」の字の形に9等分する。そうしてできる9区画のうち、中心の1区画を公田といい、公田の周りにできる8区画を私田という。私田はそれぞれ8家族に与えられる。(訳者注)  
 ⑤ 春秋時代に施行されていた土地制度。易田制とも言われる。土地の消耗を防ぐために三年ごとに休耕する制度。(訳者注)  
 ⑥ マルクス・エンゲルスの唱えた概念で、生産過程の中で現われる社会関係のこと。(訳者注)

が覇を争い、群雄が並び起こり、歴史の歯車は敗者を顧みることない動乱の中でどんどん前に進んでいきました。社会的政治制度、経済構造や文化的趨勢もこの激しい動揺の中で、広く深い変革が生まれました。奴隷解放によって生まれた自由民と貧富の差によって生まれた手工業者や商人たちによって構成された集団は拡大を続け、徐々に相対的に独立した階層を形成し、彼らは自分たちの政治的主張を持ち始め、また政治的に独立した地位を求めました。墨子はこうした階層の代表者です。

山東省の学者張知寒氏の考証によれば、墨子は小邾国の濫邑<sup>①</sup>の地に生まれました。濫邑は、もともとは商の末裔の宋国の属国で、後に魯国の領地となったため、多くの史料は墨子を魯国の人としています。この地は泗水<sup>②</sup>の兩岸に接し、土地は肥沃で、気候も温暖で、自然条件に恵まれていたので、この一帯は古くから物質文化と精神文化が比較的発達した地域であり、輝かしい邾婁文化を生み出しました。いわゆる邾婁文化とは、実際には炎族文化(すなわち東夷文化)の一部です。唐<sup>③</sup>、虞<sup>④</sup>より周の初めまで、邾婁文化は常にその他の各族の文化を牽引し、夏華文化の主要な源の一つとなりました。邾婁地区は古くから「百工の郷」と呼ばれ、古代の衣食住行の多くの器物は邾婁人によって発明され、科学技術は当時の最先端の水準でした。このように科学技術の発展した地であったからこそ、墨子のような科学技術に長けた偉大な

① 現在の山東省滕州市。(訳者注)

② 現在の山東省を流れる川く、泗河の古名。(訳者注)

③ 堯が建てたといわれる伝説上の王朝。(訳者注)

④ 禹が舜の子の商均を封じた国。(訳者注)



人物が生まれたのです。その外、邾婁地区には「天を敬い、祖先を敬い、鬼神を重んじ、なお物と争い無きことを願う」<sup>①</sup>といった風潮が強く、そこから他者を利し、仁愛を特色とした倫理文化が形成され、これらの全てが墨子思想の淵源となりました。

墨子が生まれた当時は、小邾国は魯国の属国でした。当時の魯国では、君臣たちは<sup>こう</sup>傲慢と<sup>いつらく</sup>逸楽にふける腐敗した生活をし、一日中のんびりとしていて、酒色に<sup>な</sup>溺れていました。一方民衆たちは、「飢える者は食を得ず、<sup>ひや</sup>寒える者は衣を得ず、<sup>つか</sup>勞れる者は<sup>い</sup>息いを得ず」<sup>②</sup>というありさまでした。つまり、飢えていても腹を満たす食べものが無く、寒くても寒さをしのぐ衣服が無く、疲れてへとへとになっている時も休むことさえできませんでした。社会全体が、「強の弱を<sup>おびや</sup>劫かし、衆の寡を<sup>か</sup>暴し、詐の愚を<sup>はか</sup>謀り、貴の賤に<sup>おご</sup>傲る」<sup>③</sup>強者が弱者から奪い取り、多数派が少数派を<sup>しいた</sup>虐げ、狡猾な者が正直者を<sup>た</sup>騙し、身分の高いものが身分の低いものを<sup>さげす</sup>蔑むという一種の「礼崩れ楽壊れる」という状態に<sup>おちい</sup>陥っていたのです。王室内部も争いが絶えず、斉、越などの国は虎視眈々と魯国侵攻の機会を伺い、魯国は何度も攻め込まれました。魯国は内憂外患に落ち入っていました。

こうした混乱の中で、王の権威は衰退の一途を<sup>たど</sup>り、官営の学校は次第に継続が困難になり、かわって私塾が隆盛を極めました。このような「天子、官を失えば、学、四夷にあり」<sup>④</sup>という背景のもとで、小規模生産

① 張知寒ら著『墨子里籍考論』山東人民出版社、1996年、第7頁参考。  
② 『墨子』「非樂上」以下『墨子』からの引用は篇名のみを記す。  
③ 「兼愛下」  
④ 『春秋左伝』「昭公十七年」(訳者注)



者は文化知識を学習することが可能となり、彼らも知識を得る機会を得ました。墨子はこうした背景のもと、機運に乗じて、低い身分に生まれながら小規模生産者を代弁する平民聖人となりました。彼の「兼愛」、「非攻」、「尚賢」、「尚同」、「天志」、「明鬼」、「節用」、「節葬」、「非楽」、「非命」を主な内容とした救国の主張と、彼と彼の弟子たちが科学、論理学において成し遂げた偉大な功績と、彼の「<sup>あたま</sup>頂を<sup>す</sup>摩りへらして<sup>くびす</sup>踵に<sup>いた</sup>放るとも、天下を利することは、これを為す」<sup>①</sup>という高尚な人格とが、彼自身と彼が確立した墨学とを变革の時代に咲いたまばゆい花にしたのです。

---

① 「孟子」「尽心上」天下国家のためには労苦を厭わないという意味。(日本語訳は訳者注)